

cell tumor 1例であった。

55. 妊婦ドックの成績

伊沢美彦, 片山純男 (船橋中央)

ハイリスク妊娠の管理の一助として行っている当院の妊婦ドックも最近、軌道にのり、昨年及び本年10月末までの、その分娩例は、128例(初産12.4%, 経産5.9%)に及んでいる。これらのうち、中毒症は、24%とそれなりの予防効果はあったが、同時に分娩も容易に終了(帝切2)し、母児相方の安全性(死産2)につながらる成果を得た。なお、検査異常例は、70%の妊婦に認められたが、予後は、むしろ妊婦自身の自覚に大きく影響された。

56. 産褥貧血とその処置

鈴木 三郎 (国立習志野)

妊婦の貧血に関する報告は多数あるが、褥婦の貧血に関する報告は比較的少ない様である。

そこで私たちは今回以下の項目について調査検討を加えたのでその大要を報告する。

1. 正常産褥婦の血色素量, 2. 分娩時の出血量と産褥1カ月の血色素量の関係, 3. 血性悪露の消失と血色素量, 4. . 授乳と血色素量, 5. 産褥7日間と1カ月間の血色素量の変動, 6. 再妊娠までの期間と血色素量, 7. 産褥時の赤血球および網状赤血球, 8. 処置対策。

57. 腎疾患合併妊娠の管理

阪口 禎男 (千大)

腎障害が妊娠、分娩によって、いかなる経過をとり、悪化するか否か、さらに胎児の予後にどのような悪影響を与えるかなどについて古くから検討されてきているが、いまだ明確な結論が得られていないのが現状である。千葉大附属病院で過去4年半の間の分娩例中、既往に腎疾患の認められたもの、さらに、妊娠時、腎疾患の持続が疑われ、内科受診した症例などの妊娠前より分娩迄の管理面について検討を加えたので報告する。

58. 16, 16 dimethyl-trans- Δ^2 -PGE₁ methyl ester (ONO-802) の流産誘発効果

大川 玲子 (千大)

昭和53年5月から54年10月の間に、千葉大学産婦人科において、正常妊娠22例、稽留流産9例、胎状奇胎10例の計41例について、ONO-802による流産誘発を試み

た。ONO-802のみで流産に至ったものは、それぞれ84%, 78%, 44%であった。不完全流産、不成功例でも、ほとんど全例で頸管拡張が認められた。副作用も、胎状奇胎の1例に強出血をみた他、特に治療を要するものは無く、妊娠初期中期の流産誘発物質として有効と思われた。

59. 児頭骨盤不均衡誘発要素としての高癒合骨盤に関する検討

小堀恒雄, 前川岩夫 (千大)

高癒合骨盤の骨盤開角は平均76.3°と著明な鋭角であり骨盤開角は81° \geq では $P>0.01$ で帝切および鉗子率が有意に高い。しかし、高く合骨盤と5仙椎+低癒合骨盤との間には帝切および鉗子率で有意差を認めなかった。これは一見矛盾した結果のようにみえるが、高癒合骨盤では確かに骨盤開角は狭いが、一方では入口縦径が大きいものが多く、峽部・出口で狭窄を起すことが少なかったためである。

60. 妊娠に合併した尖圭コンジロームの3症例

杉田道夫, 小林総介
(栃木県厚生連石橋病院)

尖圭コンジローム (Condyloma Acuminata) は、妊娠に合併することが多く、分娩後の自然退縮が期待できる。また、分娩時の出血、癌との合併など非常に興味ある疾患である。我々は、最近妊娠に合併した3例の尖圭コンジロームを経験した。第1例は、保存的療法で流産後に自然退縮した例であり、他2例は、大出血もなく経膈分娩に至り、現在フォローアップ中の症例である。これら3症例につき、文献的考察を加えて、比較報告する。

61. 流産後、呼吸不全を起した粟粒結核合併妊娠の1例

山内一弘, 河西十九三 (千大)

症例は、33歳 (O-P, O-G)、妊娠22週で頸管無力症のためシュロッカー氏手術予定にて入院。入院後発熱し続いて陣痛発来、妊娠23週にて流産す。その後、38~40°Cの発熱、敗血症を思わせ、抗生物質投与するも全ったく反応せず、結局、副腎皮質ホルモンにて下熱す。しかし、減量すると再び発熱するという過程を繰り返した。気管内よりの吸引喀痰の培養にて結核菌の発育を認め抗結核療法を施行した。